



## 第 39 号以降の掲載論文題目一覧 (第 39 号から第 48 号) および解説

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 守, 徳永, 好治, 岩崎, 清, 矢作, 裕, 藤原, 顕 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9682">https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9682</a>

## 第39号以降の掲載論文題目一覧 (第39号から第48号) および解説

後藤 守・徳永 好治・岩崎 清・矢作 裕・藤原 顕

### 第39号 1985年3月刊

#### 地域問題と地域経済

##### —地域社会の変動把握のための試論—

山下 克彦

本論文では「へき地」概念と、経済の不均衡発展との関連について考察を深めている。ここでは関連分野での考察を勘案しつつ、経済地理学を中心に、これまでの地域不均衡発展の論考を整理することに努めている。さらに、地域社会の基盤である地域経済の実態を把握するための前提として、北海道経済の特性について考察を深めている。

#### 酪農・漁村における高齢者の生活と高校生の意識

桶作 高子・村上 知子

これからますます進行する高齢化社会に対応して社会の関心は高まりつつあり、社会福祉行政面の報告や高齢者の実態、および将来生活に関する予測など数多く報告されている。しかし、若い世代の人達はこのことに対して無関心であると言っても過言ではない。そこで、本研究では家庭科教育の中で「家庭生活」を総合的に学習する高校生を対象とし、彼女ら的高齢者に対する関心の度合いを測り、これに教育的対応を試みることによってその意義と現実の家庭生活の中での効果を明らかにしようと努めている。

#### 僻地校の作文指導の体系を求めて

##### —入門期に着目して—

岡屋 昭雄

本論文は、僻地校の作文指導の体系のあるべき方

向をまとめている。第一次資料として、旭川市江丹別小学校発行の文集「つくしんぼ」と文集「ひまわり」を用いている。また、僻地校・作文指導のカリキュラムとしては友納友次郎著「実際的研究になれる読方綴方の新主張」を現在に生かす方向で参考にしている。特に、友納友次郎の尋一、尋二の綴方指導を援用しながら、僻地校の作文指導への応用の仕方を述べられている。

#### 僻地小学校における英語の授業の研究(4)

##### —テキスト分析に基づく英語読解指導の展開—

小山内 洸

本論文では英語読解指導の方略を主に、テキスト内容をどう効果的に読み取らせるかという問題に力点がかけられている。前稿でスミスの意見を参考にしながら、読解過程には2種類の情報が関与していることを指摘している。1つは「視覚的情報」、2つ目は「非視覚的情報」で、これら2種類の情報は相補的である。従って、読解指導の基本的な方略は、眼球の前から来る「視覚的情報」を得る技術を訓練することと合せて、眼球の後から来る「非視覚的情報」を活用する訓練から成り立つ。本論文では、後者の点の掘り下げに力点がかけられている。

#### 瀬戸内海の離島僻地小規模校と北海道の離島僻地小規模校との学力向上要因の比較分析的研究(V)

木村 士郎

本研究は前報に続くものである。前報では瀬戸内海の離島僻地小規模校と、北海道の離島僻地小規模校との学力向上要因の比較分析的研究を行っている。その結果、全体的には両者に有意差は認められなかったが、部分的には「家庭での勉強法」で北海道が瀬戸内海よりも有意に優れていた。この有意差

が継続的に見られるものであるかどうかを検討するため、本研究では、新FATを両地域の僻地小規模校の小学校5・6年の複式学級の児童に実施し、分析を進められている。

#### エレクトロニクス素子の教材化

矢作 裕

本論文は見えにくくなってきているけれども、確実にエレクトロニクス化を荷っている電子素子をこれまでと異なった目で見直し、教材や教具として利用する可能性を探ろうという一つの試みをしたものである。ここでは、200種ものデジタルICの特性が記載されている分厚いデータブックの中から、最も簡素な働きをするICをただ一個とりあげ、この特徴を見て、その時定数の測定と静電容量の測定への応用について述べられている。

#### 道南における障害児教育の諸問題（第2報）

##### 一極少人数学級の現状と課題一

木村健一郎

本論文は前報に続くものである。今回の報告では在籍数が1名ないし2名の極少人数学級の現状と問題を明らかにすることを目的とし、その問題の解決の方向、地域に根ざした障害児教育のあり方を考える資料を提供している。

#### 北海道郡部における障害児保育の動向と課題

後藤 守・小笠原詠子

本研究は北海道教育大学札幌校特殊教育学科（代表 後藤 守）が、昭和53年に実施して以来、5年毎に実施している、道内保育所・幼稚園における障害児の保育の実態に関する研究の一環として進められているものである。ここでは、道内の町村（以下、郡部という）の幼稚園に焦点をあて、過去10年間、4回に渡る追跡資料を通して、郡部の幼稚園における障害児保育の地域的特性を明らかにしようと努めている。

#### 僻地小規模校における養護教諭の職務内容に関する研究（第4報）

##### 一職務遂行上の困難点と克服の視点一

池田 哲子・芝木美沙子

本論文は第一報から第三報に続くものとして、養護教諭として新任3年間に遭遇した職務遂行上の困難点を明らかにし、その克服の視点を見出すことを目的として調査が進められている。調査結果から次の5点の課題を見出し、考察を深められている。(1)教育学部養護教諭養成課程での養成と現職教育、(2)養護教諭指導主事の設置、(3)研修会への参加、(4)活用できる情報の提供、(5)活動評価方法の検討

#### 漁村における住民の健康問題に関する研究（2）

藤井 英嘉・坂本 猛

本論文は「僻地教育研究」第37号（1983. 3）に掲載した第一報に続くものである。ここでは、その成果に立って漁村における住民の健康を考えるときの基礎的な条件を把握するために、道東漁村地域の児童生徒並びに住民の形態測定と、体力運動能力および疲労度調査を実施し、考察を深められている。

#### 釧路地方の3歳児の運動能力の発達について

吉田 邦子

3歳児以降の運動発達の特徴は、生涯にわたる人間の運動全般の基本となる動作を多様に習熟することにある。この時期は急激な変容を現す時期でもあり、また、幼児のための運動能力テストは年小児に適用しがたく、その発達の実情の量的評価は困難となっている。本研究では、宮丸（昭和59年）の作成した運動発達検査を用いて、釧路地方の農村漁村の保育園の3歳児の運動能力の発達の特徴を検査し、考察を進めている。

#### 《平衡歩行板課業》からみた幼児の動的姿勢制御能の発達及び地理的条件の検討

藤井 力夫

本研究は心理運動テストで採用されている歩行板課業を改良・実施し、幼児における姿勢の保持と歩行運動の発現の具体的様相から動的姿勢制御能の発

達を再検討することに努めている。

第30号以降の掲載論文題目一覧  
(第30号から第38号)

三宅 信一・笹嶋勇治郎

本稿は30周年記念特別号の発刊にあたって、僻地教育研究第30号(1976年3月刊)から第38号(1984年3月刊)までの掲載論文の題目の一覧を作成し、あわせて、論文の概要をまとめ紹介されている。

「僻研」三十年

藤野 武

僻地教育研究施設創設30周年記念特別号の発刊を記念して、永らく僻研の研究者として尽力された藤野武教授に、執筆を依頼したものである。本稿では、初代所長田所哲太郎先生とその先見生、研究体制の整備、研究の組織化と現代化、本道の僻地教育の現状とわれわれの任務、の4つの側面から僻地教育研究施設の今後の課題を提言されている。

へき地教育研究の回顧

安藤 忠吉

本稿は僻地教育研究施設創設30周年記念特別号の発刊を記念して執筆をされている。15年に渡る本施設の研究者を努めた経験から、(1)自由な課題設定による単発的研究から組織的研究へ、(2)へき地教育に現実的にサービスできる研究活動体制を、の2点を今後の課題として呈示されている。

僻地教育研究の私の遍歴

松下 寛

本稿は僻地教育研究施設創設30周年記念特別号の発刊にあたって、特別に執筆を依頼されたものである。20年間の僻研研究者としての経験から、“僻地いや田舎にこそ本物の教育がある”という視点を持ち、“教育の原点・原型”を僻地教育研究の中で確立すべきことを要望されている。

僻地教育から学んだもの

奈良 一三

本稿は僻地教育研究施設創設30周年を記念して刊行された特別号に掲載されたものである。岩見沢校の研究者として、僻地教育研究に従事された動機や調査研究の様子がまとめられている。また、「僻地」という用語について教育社会学的視点から言及されている。

僻地研究と私

清野 きみ

本稿は、僻地教育研究施設創設30周年を記念して刊行された特別号に掲載されたものである。研究者として30年余りに渡る研究活動の経緯がまとめられている。

都市中心主義(過密)文明への挑戦  
—僻地(過疎)教育の振興—

草刈 善造

本稿は、僻地教育研究施設創設30周年を記念して刊行された特別号に掲載されたものである。僻地教育研究施設の当時の状況、教育基本法と僻地教育、僻地教育振興法などについても言及されている。

第40号 1986年3月刊

Alaska's Rural Schools : Ideas to Share with  
Hokkaido

William H. Parrett

アラスカ州のへき地小規模校の教育環境と教育方法と、位置および自然条件で類似している北海道のそれとの比較の可能性について考察している。アラスカでは1867年のロシアからの割譲以降、1985年に至るまで3度にわたって教育制度の改革が行われ、州政府の教育行政の一元化が成立したこと。ANC SA(先住民居住請求権法)の成立により、先住民の生活、文化の変容が生じ、教育の重要性が再確認されて、そのため学校建設や、教育設備の拡充が図られたこと。また小規模校の教育指導の優位点と不

利な点が指摘されている。そのなかで北海道の小規模校における優れた指導方法や指導技術が、アラスカの教育にとっても極めて示唆に富むものであることが述べられている。

#### 僻地校の語彙教育論

—そのための体系化と実践化のために—

岡屋 昭雄

語彙指導に重点をおいた指導プログラムの導入によって、複式の授業充実を意図して研究が進められている。特に、語彙指導に成果をあげている学校を事例としてとりあげ、複式授業を充実させるための試案を提供することを目的として研究が進められている。考察は(1)語彙指導の体系について、(2)語彙指導の実践に即して、(3)学習の基本語彙に関わって、の3つの側面から構成されている。

#### 僻地における家庭科教育の実験的研究

—住居領域の指導—

島山 歌子

家庭科の住居領域は、義務教育のみならず高等学校においても被服、食物領域などに比較すると配当時間も少なく、時にはカットされて全く教育される機会もない場合もある。一方で、住居に関する正しい知識や意識の低さが日本の住宅水準の低下を招いている。本研究は、このような時期に、くらしと住居の関わりに視点をあて、理想と現実が大きく乖離している状況を凝視し、住宅水準を高めていく教育内容の選定をしていくことを目的に、僻地校の授業実践を通して検討されている。

#### 北海道における保健授業の実態とその効果について

下村 義夫

日本保健学会は学会共同研究課題として、3つの柱から保健教育の実態把握を試みている。その一つの柱である「生徒側から見た保健授業の効果」を検討した研究班は、生徒の保健認識の実態と保健授業の関連について第一次、第二次の2回の調査を実施している。本研究は第二次調査視点、つまり、(1)中学校の保健授業はどのように行われているのか、(2)保健認識の水準とどのような関係を持っているの

か、の2点について北海道地区において調査を行い、生徒側から保健授業の効果を判定して今後の保健教育の方途を明らかにすることを目的とし、考察を進められている。

#### 教育実地研究の一環としての「へき地教育」「複式教育」の報告

—その位置づけと実際—

笹嶋勇治郎

本稿は、岩見沢分校が昭和53年以来実施してきた授業「へき地教育」・「複式教育」の実際を、具体的な姿で提示することを目的としてまとめられている。その内容は、本分校におけるこの授業の位置づけとそれへの期待、実施要項(昭和60年度)、受講生のレポートと感想文、子供の作文や手紙(昭和59年度)等を基礎にしている。本報告書作成の直接の理由を以下の2点にまとめられている。(1)なによりもまずわれわれ自身の反省資料を得ること。(2)岩見沢校のいくつかの改革と並んで、教育大学における授業の創造という意欲と自負のもとにこの授業を開始したこと。

〔資料〕北海道内小・中学校の経営基本方針と研究主題一覧(昭和55年度)

小島 喜考・三上 勝夫

本資料は、文部省特定研究費の交付を受けて行われた「戦後北海道の教育現場における教育研究の展開と現状についての調査研究」について、北海道の公立小・中学校を対象に、教育研究活動に関する調査を行ったもののうち、学校経営の基本方針および学校における研究主題についての回答を一覧にしたものである。

第41号 1987年3月刊

アラスカ大学における教員養成と僻地教育

William H. PARRETT

山下 克彦(訳)

アラスカ大学における教員養成の現状が、特に教員免許取得のカリキュラムおよび僻地校での教育実

習について述べられている。履修科目は日本と比較して大きな差はないが、例えば教育学概論では20時間の教育実習が、各教科の教授法ではそれぞれ35時間、小規模校教授法では35～40時間の実習が課せられる。そして、集中した実習が14週間である。僻地校での教育実習の現状と課題は日本でも学ぶべきところが多い。

#### 北海道僻地学校の形成と社会動態（上）

榎本 守恵

へき地学校成立の過程を集落と生産との関係で明らかにしている。開拓使末期の小学校配置では、全道小学校の99校のうち「正則」（通常）校16%にたいして授業内容を欠く「変則」学校が84%であった。明治19年の小学簡易科が全道小学校総数の90%を占めていた。これら指標に特徴づけられる北海道へき地学校の実態は、開拓使の政策による集落形成及び農業や漁業の産業構造の歴史に規定されている。

#### 瀬戸内海の離島僻地小規模校と北海道の離島僻地小規模校との学力向上要因の比較分析研究（VI）

木村 士郎

瀬戸内海僻地小規模校10校と北海道僻地小規模校13校の共に小学5・6年児を対象に新FAT調査をおこなった。その結果、「学校の勉強法」と「家庭での勉強法」では北海道の方がすぐれ、「先生との関係」では瀬戸内海がすぐれていることがわかった。この結果は2年前の研究（僻地教育研究第39号）と合致する。

#### 過疎化地域の高等学校「現代社会」の現状と課題 — 津別高等学校の例から —

亀畑 義彦・長谷川 武

過疎地域における「現代社会」の授業の工夫と実践が試みられた。1つに、中学校と高校内容の関連を強める、2つに、基礎的、基本的内容を中心にして視野を拡大できる内容、3つに、思考力、判断力を重視してわかる授業をめざす。そのことが、「授業改善のためのアンケート」からも明らかとなった。

#### 僻地小規模校の特性を生かした心豊かな教育と学級経営 — 羽幌町立天売小学校の音楽的活動の試み —

亀畑 義彦・菅原 修

僻地小規模校の特性を生かし、子どもの自主性を育てるための音楽教育を、①子どもの選曲による月別テーマソング、②全校合唱と合奏、③ビデオを導入した音楽鑑賞、④音楽的遊び、⑤曲づくり、⑥学級の歌づくり、など多様な活動で実践した。その結果、学級経営と音楽活動の相乗効果が生まれた。

#### 課外教育のためのエレクトロニクスの実験

— [1] 実験支援用ボードについて —

矢作 裕

エレクトロニクスの基礎を学習する実験教材として、結線にハンダつけの作業を要しない「実験ボード」を試作した。もともとのソルダレスボードの小型のものに、電源や表示装置をとりつけ、これにICや抵抗などを付加するだけでさまざまな実験をいわば閉じたなかで行うことができ、さらに組立や分解が自由にできることによって費用も軽減できた。

#### 北方地域における冬季の幼児の野外あそびの実態II — 園へのアンケート調査を中心にして —

吉田 邦子

道東（網走、北見、十勝、釧路、根室）の保育園57園、幼稚園44園のアンケート調査から幼児の野外あそびの実態を明らかにした。①あそび時間は6割の園が0.5～1時間であり、あそび時間の不足が感じられている。②あそび場は園庭の他に公園、坂や山の利用が高い。③あそびの種類は雪遊びに人気が集まっている。④園としての工夫は多岐にわたっている。

第42号 1988年3月刊

#### 僻地小規模校における地域学習 — 赤平市立住吉小学校の獅子舞伝承活動を中心にして —

村田 文江・進藤貴美子

住吉獅子舞が地域の歴史とかかわって今日まで伝承されてきた歩みが、明治41年から現在までを第Ⅰ期～第Ⅴ期に区分して概観する。そして、過疎進行とともにその伝承と学校との結びつきが生まれ、「ふるさと学習」の内容が豊になり、伝承芸能の継承と子育てを共通の課題とする地域と学校の共同関係が創出され発展していく、その過程が実証的に明らかにされている。

「蝦夷地史」の教材構成  
—アイヌ木綿衣服と蝦夷地の歴史—

笠間 浩幸

アイヌの木綿衣服は、その材料生産は本州であるが、衣服製作をアイヌ自らがおこなうなかでアイヌの伝統的衣文化として形成された。アイヌ木綿衣服に焦点をあて、本州における木綿生産とアイヌ労働の関わりで蝦夷地の歴史を考察している。そこから、日本近世史の教材づくりの視点をさぐっている。

緬羊とあそぶ  
—教材研究ノート—

三宅 信一

「衣」生活文化史を学習課題とするために、羊毛の糸紡ぎ、緬羊の飼育、羊毛の草木染め、手織衣製品の作成について、体験にもとづく報告がされている。さらに、「羊膜」「羊水」の語源等についての文献研究がされている。

授業書「電圧」の構想  
—「層子間相互作用」の変動の実体的イメージ化に基づく「圧力」の教材化の試み—

倉賀野志郎・中村 美保

電流の「圧力」を、固体の圧力、液体の圧力、気体の圧力を統一的にとらえる「層子間相互作用」の観点でとらえなおし、その視点に基づく「電圧」の実体的イメージ化を目的とした教材及び「授業書」が提示されている。授業書は、1：導線の中はパンパンだ、2：パンパンの伝わり方、3：電気の通り道、の3部構成である。

小型炉による「鉄づくり」操業実験  
—操業マニュアルの開発をめざして—

高嶋 幸男

授業実践としての「鉄づくり」のマニュアルを確立するために、これまでの実践者、久津見、中川、天野、大月、一瀬らの操業実験を比較検証した。それをもとに、20段階の操業マニュアルと実際の操業結果を報告している。95cmの低い炉高で、炉頂温度を600℃以上に保つことができ、鉄の生成は確実であった。

単級学校についての国際比較  
—ユネスコ調査報告（1961）を中心に—

門脇 正俊

ユネスコの国際教育局が69カ国を対象におこなった調査報告書「単級学校」の内容が紹介されている。69カ国中58カ国（84%）に単級学校が存在するが、それらの国の単級学校における、教員数、生徒数、特別な規制、教育期間、教育課程・教授要目と方法、時間表、個人学習、集団教授、教員の養成・報酬・転勤状況、長所と短所について述べている。

オーストラリアにおける「へき地教育」（その1）  
—アリス・スプリング放送学校の場合—

佐藤 有

世界でもユニークな教育施設の一つであるオーストラリアの放送学校について、その先駆けであり典型的なアリス・スプリングでの実践が報告されている。放送学校とは、初等教育を①通信によるもの、②家庭訪問によるもの、③放送によるものの3本立てでおこなうものである。放送によるものは、双方向ラジオにより、月曜日から金曜日まで時間表にもとづいた教科等の教育がなされ、毎日、教師とこどものグループとの双方向授業、1週間に一度の10分間の個人授業をおこなうものである。

英国における農村地域開発の側面

山下 克彦

80年代の英国の農村地域の開発政策について、その社会・経済的背景、主要開発機関の成立について、

特にスコットランド北西地域とイングランド北部ノーザンバーランド地域の開発地域に焦点をあてて報告している。農村地域の開発は農業生産を最優先とした規制の方向から、雇用機会の拡大を企画した農村経済の多様化に基調がみられるのが特徴である。

#### 「出席停止」の教育法的検討

小島 喜孝

少年非行にたいする学校教育上の措置としてなされている「出席停止」について、学校教育法26条との関連で検討を加えている。その条項を行使できる要件は、「性行不良」にたいする教育的判断にあるのではなく、「教育の妨げ」についての客観的事実に基づくべきであり、いたずらに問題行動にたいする制裁あるいは懲戒としての意味をもたせてはならないと結論する。

#### 公務員の年休権行使と時季変更権

小川 環

公務員の年休権と使用者の時季変更権との関連について最高裁が下した判決、「徳島県職労事件」「夕張南高校事件」「弘前電波電報局事件」の三判決について、それら事件の概要と判決内容の分析、および両権の関連を述べている。最高裁の判決はいずれも事実審理に意をつくし、労基法の観点からなされた公正なものであると評価している。

### 第43号 1989年3月刊

「へき地教育」用語の歴史的系譜についての一考察

門脇 正俊

「へき地教育」とこれに類似した用語「村落教育」「田園教育」「農村教育」等の系譜をたどりながら「へき地教育」用語が使用され公認されてきた過程を考察している。「僻地教育」という用語の使用例は戦前にも認められるものの、その使用例は極めて僅かであり、教育用語として定着したのはへき地教育新興法の制定前後であったことが指摘されている。

へき地校における「表現豊かに発表できる子供」の育成  
— 土別・兼内小学校の例から —

亀畑 義彦・水上 丈実

国語科物語教材研究を柱とし、学級経営・全教育活動の中での言語活動・言語環境の整備等、多角的な実践活動を通して、児童の表現力育成に取り組んだ研究報告である。児童に対する教育効果だけでなく、学級の壁を乗り越えて、全教師が児童一人ひとりを見つめ育てていくという児童の変容を第一に考えた研修体制を確立できたことが成果として挙げられていることに注目されたい。

「回数測定装置」を利用したなわとび運動による敏捷性養成の有効性に関する一考察

藤井 英嘉・平岡 亮・矢作 裕

敏捷性を向上させるための運動手段としてなわとび運動（スピードとび）の有効性を検討している。また、研究の推進にあたって、子どもたちをなわとびに熱中させるための試みとして、コンピューターを利用した「なわとびの計数装置」を試作し、測定を行ったことが特徴的である。厚静小学校の在籍児童38名を対象とし、その内の19名はスピードとびの練習ノルマを有する実験群、それ以外を練習ノルマの無い統制群とした。実験群の場合、反復横とびはポスト・テストが有意に高く、スピードとびでもポスト・テストがプレ・テストよりも測定値が高い傾向を示した。

### 第44号 1990年3月刊

寒冷地における自然科学教育  
— 土はどのように凍っていくか —

矢作 裕

北海道のような寒冷地では「寒さ」にまつわる現象を自然科学教育の素材として積極的に取りあげる必要性が強調されている。その一環として、研究用に開発された凍結速度計を中心にすえて模型的にとりあげた教材「土や湖の凍結」が紹介されている。本研究で試作した簡単なしくみの測定装置は、コンピューターの特徴をシンプルにひきだしうという



だけでなく、水と氷にまつわる科学教育のいきいきした素材という点でも多くの示唆的な内容を含んでいることが指摘されている。

#### 地域社会と家庭科教育

##### —家族と地域社会の機能連関について—

会田 京子

家庭科教育における地域社会の概念を家族との機能連関をふまえて規定することによって、家族の生活は地域社会の下位体系として位置づけられ、地域社会と相互の機能的交換関係を展開して維持されることを明らかにしている。また、生活維持をめぐる諸問題は地域社会との機能的交換過程の歪みを、直接的・間接的にあらわしている現象として捉えられること、家庭科教育においては、この歪みが個人及び家族の生活にいかによりマイナスにはたらいているかを客観的に捉え、これらを家族と地域社会の生活問題として確認する必要があることが指摘されている。

##### 僻地小規模校における養護教諭の職務内容に関する研究（第5報）

###### —修学旅行時の健康管理—

池田 哲子・朽本しのぶ・安田 綾里

養護教諭の実践の中から養護教諭の職務を明らかにすることを目的に、小規模校の多い地域の中学校の養護教諭を対象として、修学旅行における健康管理の概略を調査している。修学旅行の養護活動は広範囲にわたっており、関係者・養護教諭の努力と十分な配慮のもとに常に綿密で周到な準備が行われていることが明らかにされている。

##### 北海道郡部における障害児保育の動向と課題（第2報）

後藤 守・小笠原詠子・小笠原 仁

昭和48年から63年まで5年毎に4回実施された追跡調査にもとづき、北海道郡部における障害児保育の動向を分析している。分析された内容は①障害幼児の受け入れ状況、②幼児に対する保育の実態、③総合保育による保育の効果、④障害児保育に対する保育担当者の意識である。障害種別にみた受け入れ状況は精神遅滞が増加傾向にあり、これと対照的に

情緒障害の占める割合が相対的に減少の方向にあること、高い割合ではないが肢体不自由児の占める割合が増加傾向にあることが認められている。また、総合保育による保育の効果を認める回答が高い割合で推移していることも明らかにされている。

##### 西オーストラリア州・パース日本人学校の教育について —海外における小規模校の教育の実践—

亀畑 義彦・松倉 康夫

西オーストラリア州・パース日本人学校の教育の現状（パース日本人学校の概略、パース日本人学校の教育、海外の日本人学校で使用している教科書）が報告されている。また、共著者（松倉）が海外派遣教員としてパース日本人学校に3年間勤務した経験をふまえて「国際理解教育」のあり方について提言をしている。

##### 僻地極小規模校における教育についての一考察

亀畑 義彦・三木 勝仁

教職員5名、全校児童9名という極小規模小学校における教育活動の中から僻地教育の課題が浮き彫りにされている。とくに重要課題とされた「児童に思いやりの心と自分を鍛える心、競争する心を育てる」という課題の実現にむけて取り組んだ事例（朝マラソン、他町の海辺の小学校との交流）が紹介されており、僻地教育に携わる教師のあり方についても言及されている。

##### 僻地教育研究・実践動向

標記のことについて、各分校における現状が報告されている。

1. 小規模学校・複式授業観察参加について  
旭川分校 池田 哲子
2. 今年度の集中講義「へき地教育」「複式教育」の実施について  
岩見沢分校 新田 和幸
3. 岩見沢分校へき地複式教育研究会の活動について  
岩見沢分校 関根 郁恵（学生）
4. 授業科目「へき地・複式教育」を担当して  
函館分校 扇谷 久

5. へき地複式校での6週間の教育実習  
函館分校 湊 秀樹 (学生)
6. 釧路分校と僻地教育研究  
釧路分校 矢作 裕

第45号 1991年3月刊

「地域と教育」研究における北海道の僻地教育研究の役割

～都府県との比較による問題提起～

玉井 康之

表題のように、この紀要の中心的な課題に正面から取り組んだ論文である。14ページにおよぶ論文であるので、表題のみを紹介する。

I. 課題と方法 II. 北海道の僻地学校の歴史的展開と地域 III. 北海道の僻地における自然的・経済的条件の変化と都府県との相違 IV. 北海道の僻地画工の長短所と僻地教育の可能性 V. おわりに

障害児保育に関する地域的特性に関する研究  
～北海道郡部の保育所の事例を中心として～

後藤 守・小笠原詠子・  
小笠原 仁・金澤 克美

健常児中心の保育が再検討されるなかで北海道の障害児のための保育の取組みとして、その量的検討から質的検討を、保育関係者からもとめられている。このことに起因して、この取り組みはひとつの転換期に直面しているとの問題意識をもち、詳細な調査に基づいて、障害という問題を構成する3つの要因を関連させながら分析を行っている。

物理系の理科実験教材の開発  
～コンパレータ型組立て電圧計について～

矢作 裕

教育系大学の基礎物理実験は、物理学以外の多様な専攻の学生が混在した状態で行われ、実験内容の構成には相当の配慮が要る。加えて、実験装置の不足、経費の問題もあってグループ実験を与儀なくされているなど担当者は苦慮している。ここでは、各自が電圧計を組み立てることが、そのまま授業の内

容となり、それがその他の多くの実験項目の主要な装置として、一貫して機能するような「比較型電圧計」に関する論文である。

小学校における青銅鏡づくり  
～そのマニュアル開発と実践の記録～

高嶋 幸男・佐藤 広也

歴史学習における「ものづくり」学習を歴史認識の形成の有効な方法として捉え、「鑄物のつくりかたを実際に知ることを通して、人間はどのようにして金属の道具を作り、使うようになったかを考える」ことを学習の目標にかかげての実践である。この実践が小学校6年生が、高温の作業を含む難しい内容を卒業製作の一環として、生徒60名が参加のもとに行われているのも、この実践の特徴である。

剣道における跳躍素振りの指導に関する一考察  
～素振りのリズムに注目して～

岡嶋 恒・関 慶広

素振りは剣道の基本動作であり、稽古前の準備運動や稽古後の整理運動としても重要である。そして、その動作はリズムミク運動である。この点に注目して、上級者、中級者、初心者の動作をコンピューターと連携した装置を用いて詳細に量的に分析した論文で、体育における基礎的データを提供している。

#### 僻地教育関係資料

木下めぐみ・宮川 史・百瀬美樹子・関根 郁恵  
僻地教育研究の資料として、旭川校、岩見沢校から4名の学生が小論をまとめている。旭川校の木下めぐみ、宮川 史は僻地小規模校での複式授業への観察・参加体験をまとめている。また百瀬美樹子は、岩見沢校で開設している「へき地教育」「複式教育」の授業および僻地校での教育実習体験を中心に報告をまとめている。同じく岩見沢校の関根郁恵は、第6回北海道複式教育実践研究発表会（北海道複式教育連盟主催）に参加した体験報告を中心にしながら、あわせて、発表の内容にも言及している。以下は小論のテーマである。

木下めぐみ：教育の原点—小規模校参観について—

宮下 史：小規模校の子供たちと出会って

百瀬美樹子：4年間の「へき地・複式教育」とのかかわりを振り返って

関根 郁恵：北海道複式教育実践研究発表会に参加して

## 第46号 1992年3月刊

### へき地社会の変化と社会科教育の課題（上）

～北海道帯広市清川地区を例として～

君 尹彦

論文は、第1章 問題の所在、第2章 へき地社会としての清川の成立、第3章 1960年前後の清川社会科教育、第4章 清川地区の変化と社会科教育の課題のように構成されている。この論文はその前半部分である。へき地教育への取り組みを近代北海道がかかえる課題のひとつとして捉え、教科としての社会科が、転換期を迎えた時期に、これからの社会科をへき地教育にどのように位置づけていくべきかについて考察している。

### 北海道におけるスクールバス導入の地域的特性

山下 克彦

北海道教育庁の資料をもとにスクールバス導入の地域的特性とそれに関わるいくつかの問題点について実証的に整理されている。さらに導入の形態を区分して、利用の形態、走行距離など、いくつかの指標を用いて地域性との関連を分析している。また学校の統廃合の進展の度合、行政区域の広狭、集落配置、学校立地などが指標の相違の大きな要因となっているとしている。そして、人口減少地域での自治体の役割の重要性と、多様な交通の需要を統合化するための制度的な見直しが求められていると指摘している。

### 地域の特色を生かした図面工作・美術科教材開発のための方法論的検討（1）

山田 一美

この論文は、具体的な地域教材の事例や構想をもとに、地域の特色を生かす教材開発の方法の検討へ続く内容の前半部である。当論文では、「地域の特色

を生かす」ための教材開発上n問題点を明確にするためとして、1. 美術文化と地域環境と教育の関係を学校教育以外の場の視点から考察し、2. 地域の実態に即した教育課程について整理と考察をしている。

### 北海道農村小規模学校の学校運営と地域との連携 ～阿寒町仁ノ志別小中学校を事例にして～

玉井 康之

小規模校と地域との関わりを多方面から論じている。すなわち、その切口としては、その学校の形成の歴史と地域、成立過程と地域、地域の伝統的文化活動の展開と地域、地域の教育環境整備検討委員会の創設をめぐる、PTAの組織構成と活動の特徴、学校行事と住民の参加、社会教育学習活動と学校との連携、などである。最後に、PTA活動への参加と「地域と学校」に関する意識特性について、具体的な調査をもとにまとめている。

### 身近な植物による草木染めの教材か ～自然の生命から〈色〉をいただく草木染め～

笠間 浩幸

単に染料を木にもとめ、布を染め上げる行為としてではなく、自然と人間の精神との関わりを背景にして、染色を教材化しようというユニークな内容の論文である。著者は、「... 自然に対しての能動的な行為（自然から〈色〉をいただくこと）を通して改めて自然を知り、自然と人間の関係を見つめ直していくことを目標とする教材として〈草木染め〉を位置づけたい。」としている。そして、具体的な「染め」の技術的背景、使用する試薬や器具、染めの実際について、具体的にまとめている。

### 酪農村における児童の生活実態

奥山 洸

この論文は、1981年に行われた、北海道の9,169名の幼児、児童、生徒を対象とする生活実態の全道調査にみられた子どもの心とからだについての知見を時代の変化を織り込んでさらに深く、内容を豊にしようと企図されたものである。著者は、この調査によって、さきの調査結果や知見を補完する事実や新

たな発見を期待して、阿寒町仁々志別地区の5つの部落の67戸を対象として、学校を通じて調査をし、その分析を行ったうえで、さきの調査との比較を行っている。

#### 「へき地教育振興法」の制定過程に関する一考察

関根 郁恵・新田 和幸

この法律がどのような背景で成立したか、その背景と制定過程を詳細にたどった論文である。国民の教育権が固有の権利として保障されるなかで、教育基本法が制定され、教育の機会均等（第3条）を根拠として、へき地教育の根拠となった過程についてまず述べられる。そして、へき地学校の教師たちのうごきをたどって、「へき地教育振興法」の制定運動、同案の国会での審議経過を国会の会議録をもとに論考している。

#### どこでも簡単にできるバイオ学習の展開

佐々木久視

急激な発展をとげている、バイオテクノロジーは高度の技術であるが、それを簡単にして学習にとりいれようと企図された論文である。まず、「バイオ学習」による教育効果について論じ、それを実現するための技術的な器具や装置（無菌箱）や、培地の準備、実際の植え込み、などについて実例を示して記述されている。そして、技術科での学習や小、中学校の生命科学の分野で豊かな展開がはかれるものと結んでいる。

#### 地域における学校5日制の社会的条件

小島 喜孝・青梅 秀弥

学校5日制の社会的意味と課題として、学校5日制の問題の構造について、背景や議論の経過をたどり、その移行の社会的な条件について考察している。ついで地域（歌志内市）における子どもの保護・教育能力、これに関係する医療と福祉の関係などにも触れて考察を加えている。後半は、学校5日制に向けた歌志内の地域課題として、発想の転換をうながし、環境問題や平和への願い、ボランティア活動への取り組みにも言及し、学校5日制を実現するうえでのポイントを指摘して論文を閉じている。

### 第47号 1993年3月刊

#### 全道小学校アンケートによる今後5年間の学校統廃合に関する統計分析

田中 実

僻地における今日までの学校統廃合問題の特徴と今後の傾向を、統計資料と全道アンケートの分析によって把握している。それに基づいて、今後の僻地における様々な教育課題に対する基礎的資料を提供している。

#### 障害児保育に関する地域的特性に関する研究（II）

—北海道郡部の幼稚園の事例を中心として—

小笠原詠子・金沢 克美・後藤 守

障害児の発達にとって有効な保育環境を検討するという前報の研究視点を踏襲しながら、幼稚園を事例に郡部の障害児保育の様相を浮きぼりにしている。それを通して、今後の幼児教育のあり方について言及している。

#### 情報供給量からみた僻地教育環境の問題点（1）

—離島の情報化の実態と子どもの学習意欲との関係—

中森千佳子・猪股美由紀

質問紙調査によって、地域の情報供給量の差が子どもの学習意欲に与える影響を明らかにしている。そして、情報社会におけるこれからの僻地教育に必要な教育環境の整備についての方策を示唆することを試みている。

#### 地域の自然を生かした環境教育

—学習テキスト「海の砂漠」の開発—

田中 邦明

理科教育における環境教育の基礎的課題が生態系概念の形成にあることを論じ、地域の生態系から習得可能な概念を析出している。そして、それらの概念の習得をめざす仮説的地域学習教材を提案している。

農村地域の中学校における郷土芸能の学習について  
—北海道上川郡朝日町，朝日中学校における瑞穂獅子舞の学習を中心に—

大塚美栄子・土岐 勝浩・前田 和司  
瑞穂獅子舞と朝日町の概要，瑞穂獅子舞の全校観賞会と保健体育科におけるその実践についてまとめている。そして，学校教育と農村に生きる芸能との関わり，地域と学校の芸能を通じた結びつきについて論じている。

僻地・小規模校における養護教諭の職務内容に関する研究（第6報）

—健康診断をめぐる—

池田 哲子・木村 有貴・清水 香織  
僻地・小規模校への養護教諭配置に即応した養護教諭養成教育のあり方を見出すことが，この研究の目的である。本報告では，質問紙調査によって，健康診断をめぐる養護教諭の機能と役割を探っている。

北海道における「学校と地域」の連携と地域の教育力  
—全道学校アンケート調査による実態分析—

玉井 康之

地域性や学校規模などの条件による学校と地域の連携の現状を統計的に示し，その連携のあり方をとらえている。そして，地域の教育力の回復にとって重要な学校と地域の連携の再評価を試みている。

実験・観察へのコンピュータ利用について

(1) 理科教育とコンピュータ技術

矢作 裕

コンピュータを理科教育の実験や観察に利用する際に留意すべきことがらについて，いくつかの例をもとに紹介している。同時に，コンピュータの具体的利用に必要な電子的工作の現況についても触れている。

RURAL EDUCATION IN VICTORIA, AUSTRALIA

ワレン ブライア

ビクトリア州はオーストラリア全土の3%にあたる面積をもつ最も小さな州である。(ただしこれは日本の面積の約半分に相当。)一方，人口は450万人をも有し，オーストラリアでは極めて人口密度の高い地域を構成している。だが，他の州と同じように，へき地における過疎化が1980年代初頭に進行したため，へき地教育の克服をねらいとした様々な努力がなされてきている。

本論文では，前半で英国によるオーストラリアの発見，人植，オーストラリアの羊毛産業，気候，地理条件，2重の意味での「距離の暴虐」(ヨーロッパ世界からと広大な国内における距離的隔離)というオーストラリアのへき地教育の特色を形作ることになった全体背景を扱っている。中半では歴史に沿ってビクトリア州におけるへき地教育の形成過程を扱っている。その特徴は州政府による中央集権性であり，教育内容も都市のものと同じであったことである。後半ではビクトリア州の現在のへき地校の3つのタイプの分類について，また労働党政府(連邦政府，ビクトリア州政府)の現在のへき地教育についての政策(教育の意志決定の中央から地方への移動)，更に現在へき地の学校が直面している新任教師，教師と地域等の諸問題(issues)について扱っている。

NEW DIRECTIONS IN RURAL, EDUCATION  
IN VICTORIA, AUSTRALIA

ワレン ブライア

本論文は前論文を引き継ぐ論文である。ビクトリア州における1980年代のへき地教育の具体的な改革を紹介している。内容はへき地地域の学校のグループ化(clustering)とテレマテックスと名づけられるコミュニケーション・システムの導入(テクノロジーの利用)を組み合わせた。テレマテックス・クラスターズに多くが割かれている。クラスターズとはグループ内での学校間の教師，カリキュラム等の共有，クラス規模の拡大化というもので，後者はそれをテクノロジー的に保証するものであり，両者が組合わさって教育効果をあげている。テレマテックスは数百キロ離れた学校間における音楽の授業や小学校での外国語教育で特に多く利用されている。このシステムの導入により学校間の共有・協力意識が高まった，と言う。

トオウパック (towpack) の紹介もなされている。それはへき地でのサービスのための、索引軍の上に設置された移動可能な教室であり、5台のコンピューターワークデスク、プリンター、作図装置、エアコンデショニングを備えている。

「カントリー教育プロジェクト」(連邦政府政策)のビクトリア州での試みについて、またメルボルンにおかれている放送学校の機能と役割についても紹介されている。

読者は、今日のオーストラリアのへき地教育の特徴の一つかテクノロジーの積極的な利用にあるということを感じるに違いない。

著者は最後に、へき地教育の評価にかかわって避けては通れない検討問題をあげている。いずれも古くて新しい問題である。私たちは日本における検討課題との強い共通性を見いだすことができる。

A comparative study of the system of five school-days in Japan and at small schools in the city of Calgary, Canada

亀畑 義彦・横山ひろき

この論文は、日本で、週休二日制を導入するか否かが論じられた頃、北海道教育大学と姉妹提携をしているカナダのカルガリー大学の関係する小・中学校の週休二日制について、カルガリーの学生や小・中学校の父母たちにアンケートを行い、週休二日制についての考え方や、その休みの使い方等について聞き、日本における週休二日制導入の参考にしようとしたものである。

北海道教育大学旭川校の卒業生達は、その殆どが、僻地の教員になることから、カルガリーにおけるアンケート調査も、小規模校を対象としている。

カルガリーと日本の小・中学校で最も異なるのは、カルガリーは移民の多い国で、言語も様々であり、英語を話すための教育に多くの時間を割かねばならないカナダと、受験勉強に時間を割かねばならない日本との特殊性の中での週休二日制の問題など、厳しい現実の中での調査結果である。

## 第48号 1994年3月刊

### Rural schools across the Pacific

Bill Pfisterer

アラスカ州には55の教育区があり、うち26はアラスカ山脈の西部・北部の僻地に位置し、いくつかの特色あるアラスカ原住民の子供たちに教育を提供している。

これらアラスカの僻地校のスタッフは、しかし、主として州外で育ち、インディアン・エスキモー・アリュートらの文化には殆ど馴染みのない白人の教師たちによって占められているのが現状である。

本稿は、アラスカ僻地校における歴史的背景を簡潔にまとめ、無特に、ある2僻地校の地理的セッティングや、特色ある教育的取り組みについて紹介する。さらに、その職員構成や教育課程が、それら2校の現状にいかに関与を及ぼしているかについて詳述している。

### 僻地における技術科教育の実施状況に関する調査研究

井上 平治・金田 弘

道南の公立中学校82校を対象として、質問紙による調査を行っている。この調査によって、道南における中学校技術・家庭科の学習指導の動向や、新教育課程の履修上の問題点と地域差の関係を明らかにしている。

### カナダ極北地域における先住民族教育についての文化人類学的研究

—カナダ北西準州ペリーベイ村の学校教育の事例を中心に—

岸上 伸啓

カナダ北西準州の学校教育のシステムを、狩猟民族であるカナダ・イヌイットの村ペリーベイの学校教育を事例として紹介している。そして、急激な変化をとげている社会における学校教育の役割について検討している。

火山災害についての教育  
—北海道駒ヶ岳付近の中学生の意識—

紀藤 典夫・鷹沢 好博

自然災害教育に注目して、北海道駒ヶ岳火山を例にとり、近隣の中学生の駒ヶ岳に対する意識調査を行っている。そして、これからの火山災害教育のあり方に関して基礎的な資料を提供している。

僻地校における経済の仕組みを考える“ごっこ遊び”  
教材

—その授業実践・課題と教材構成提案—

平田 朋美・倉賀野志郎

複数学年を巻き込んだの小人数なるが故の経済学習の教材構成の実践・課題と、教材展開の可能性を整理している。全学年を対象とする別海町立中春別小学校で行われた授業実践の記録が紹介されている。

実験・観察へのコンピュータ利用について

(2) 大・小規模校における教育計画と授業実践〔音の高さと振動数〕を例に

矢作 裕・酒井 源樹・高橋 和幸・  
大崎 治樹・五十里一路

これまでの自然科学研究におけるコンピュータ利用の成果と経験をもとに、具体的な授業実践によって理科教育へのコンピュータ導入の方途を創り上げることが試みている。大学と中学校の教員の実践的共同研究である。

僻地教育研究施設40年の歴史と課題

—その予備的考察—

門脇 正俊・市川 雅絵・菅原 良子

本学僻地教育研究施設の設立の経緯、そこで展開されてきた研究活動を振り返りながら、今後の研究課題が提起されている。また、本誌掲載論文の研究領域別分類と二つの論文へのコメントが行われている。

極東ロシア最北部における教育大学の改革動向  
—国際会議「教育と国際協力」(1993.1.5-6. マガダン)への参加報告を兼ねて—

門脇 正俊・桑原 清

本学とマガダン教育大学との交流の経緯、マガダン州とマガダン国立教育大の歴史、マガダン教育大学の改革動向が紹介されている。同時に、上記国際会議への参加の日程、会議の概要が報告されている。

アボリジニーおよびトーレス海峡島系住民：Mobo  
判決から見たオーストラリア社会における彼らの歴史と位置

ノエル・ルース

小山内 洸 (訳)

200年に及ぶ白人による植民化以後初めて先住民の土地権を認めたオーストラリア最高裁におけるMobo判決をめぐる様々な問題について、検討を行っている。原文と翻訳文の両方が掲載されている。

カナダの多文化教育

リチャード・ヒラバヤシ

山下 克彦 (訳・解説)

本学大学院生を対象として行われたカナダの多文化教育に関する講義の記録、及びその解説である。二つの公用語をもつカナダの歴史、多文化と教育の関係、多文化教育の理念とその教育方法が紹介されている。

SHANDAA: In My Lifetime

Bill Pfisterer (編)

後藤 守・金澤 克美・加藤 富夫 (共訳)

本書は本僻地教育研究施設で取り組んでいる共同研究「環太平洋地域のへき地教育—北海道・アラスカ・ロシアマガダン地域との比較研究」の基礎文献として翻訳されたものである。本書はアラスカに住む、一人のアサバスカンインディアン、Belle Herbertの生涯を通して、ウラスカの歴史、地理的、そして社会風土を浮きぼりにしようと努めている。原著はアサバスカンのことばで語られた Belle Herbert のことばが、英訳語と対応させて記述され

ている。本書の題名「SHANDAA」はアサバスカン  
インディアンのことばで「私の生涯の中で (inmy  
lifetime)」という意味である。日本語訳は全て英訳  
に基づいている。